

アリ・アスターの『エディントンへようこそ』（2025 原題『Eddington』）は、これまで『ヘレディタリー/継承』（2018）『ミッドサマー』（2019）『ボーはおそれている』（2023）といったホラー系の作品とは多少異なるアメリカの地方都市（と言ってももかなり小規模な街のようですが）での市長選挙を巡る騒動を描いた作品です。時代設定は2020年で、まさにCOVID-19とBLM（Black Lives Matter 黒人に対する暴力や構造的な人種差別の撤廃を訴える社会・人権運動）の只中にあり、現代アメリカの政治や社会を動かすダイナミズムを描き、アメリカという大国の縮図としての地方都市を描いたものでもあります。とにかく本作には嘆かわしい現実が続々と提示されるのですが、その中でもSNSという怪物は非常に厄介な存在感を示します。SNSの発信者は、誰もが成り得る存在であり、知ってるつもりでも実はその対象の現実をまったく知らない歪な状態を生んでしまう怖さがあります。また、スマホによる撮影は現代社会における強力な武器であり劇薬でもあります。絶対的な真実と固定されてしまう怖さがあるからです。つまり、客観的な事実など存在せず、あるのは個人的な解釈であり、言い換えれば情報の非対称性とそれを原因とした狂気という現代病の元凶と言えるのではないのでしょうか。市長選挙を巡る騒動は殺人・テロ行為へと発展していくのですが、アリ・アスターは自らの特徴である毒気を地獄絵図的エンターテインメントに終わらせることなく、無知がもたらす防衛本能の暴走と貧困という逃げ場のない土壌を明確に表現することで痛烈な現代社会への批判を行います。1986年生まれこの有能な映画作家は、小林正樹と今村昌平の作品を高く評価し参考にしていてとまで公言しているようで、特に今村昌平への傾倒は興味深い話です。そういえば、今村作品での「滑稽さと残酷さ」があるようにも感じます。今村昌平の制御不能な社会への冷徹な視線が共通するのかもしれません。また、登場する主だったキャラクターがパラノイア（偏執狂）であるところかもしれません。この辺りにも、今村作品の色合いが濃く映し出されます。

そのアリ・アスターがプロデューサーの一人として参加したヨルゴス・ランティモスの『ブゴニア』（2025）も興味深い作品です。2003年に公開された韓国映画『地球を守れ!』（チャン・ジュヌファン監督）のリメイクだそうです。これを筆者は見えていないのですが、『ブゴニア』は2026年最初の衝撃作といった感想を持ちます。プロットの説明は省きますが、ブラックコメディやスリラーの要素が強いものの、ホラー映画のジャンルに属する（またはホラーに隣接する）作品として考えられています。「無意識のうちに自分の信じたい物語を投影し、都合の悪いグロテスクな事実を美しい虚構へと脳内転換してしまう。この認識の誤認こそが本作を貫く関心的

テーマ」と評した竹島ルイ氏の見解に賛同し、「あまりにも滑稽なレクイエム」という表現にも同意したい作品です。何しろ、陰謀論にまみれた男たちが、自分たちの信念（エマ・ストーン演じる企業のCEOは地球を破壊するエイリアンである）に基づいて拉致・監禁するストーリーで、心理的な恐怖や不穏さ（サイコロジカル・スリラー）が全編に漂います。また、ランティモス特有のブラックユーモアと、誘拐・拷問・虐待といった過激な描写が組み合わさっており、ホラー的な緊迫感を生み出しています。血が飛び散るような直接的なホラーというよりも、人間の狂気や社会の不穏さを描く、心理的・ブラックコメディ的なホラー映画（ダーク・コメディ・スリラー）と言えます。ここでもヨルゴス・ランティモスの毒気が充満し、予想を裏切るいくつかの仕掛けが登場します。狂気の真実の境界線を行き来し、分断と独裁色の強くなった現代世界に突き刺さる劇薬的効果を発揮する作品です。描き方こそ違い、高い評価を得たポール・トーマス・アンダーソンの『ワン・バトル・アフター・アナザー』（2025）と共に現代アメリカの分断と狂気を表現した警鐘でもあり、二人の共有する危機感が大いに気になるのです。

古い作品の一つ取り上げます。ジャック・ベッケルの『穴』（1960）で、これはジャック・ベッケル（1906-1960）の遺作です。1947年に実際に起きたフランスのラ・サンテ刑務所で起きた脱獄未遂事件を題材としています。この脱獄に関わったジョゼ・ジョバンニとジャン・ケロディが本作に関わり、ジョゼ・ジョバンニは原作と脚本メンバーの一人として、ジャン・ケロディは脱獄犯の一人を演じます。ジョゼ・ジョバンニといえば戦時中のゲシュタポ協力者であり、誘拐・窃盗の前科を持ち死刑判決さえ受けた人物であり、戦後の恩赦で刑を免れた後は自らの経験を踏まえ小説家として活動。監督、脚本家としても活躍しアラン・ドロンと組んだ『暗黒街のふたり』（1973）『ル・ジタン』（1975）などの映画作品は、高い評価を得ましたし、何といてもロベール・アンリコの傑作『冒険者たち』（1967）の原作も発表しています。さしずめ日本の安藤昇や若松孝二か、それを凌ぐ存在です。本作は脱獄のノウハウを余すところなく伝えた教科書的な作品であり、要所はドキュメント風にカメラをフィックスにした状態で長回しするという手法を選択し、一層のリアル感を引き立てます。その穴を掘るといって大変な肉体労働を見れば、誰もが脱獄に期待を寄せ応援する気持ちになるでしょう。しかし、ハリウッド的エンターテインメント風に仕上げカタルシスが用意されているのではなく、重苦しい沈黙と喪失感で終わらせる、この突き放し方こそがフレンチ・ネオ・ノワールの真髄と感じられるのです。ヌーヴェル・ヴァーグの映画作家とは一線を画しながらも、彼らから深く愛されたジャック・ベッケルはあくまで職人的な古典主義の延長線上にあり、誰よりも厳格に真実を追い求めた人物だったのです。本作のプロデューサーは、ルイ

ス・ブニュエルの名作を複数手掛け、黒澤明『乱』(1985)や大島渚『マックス・モン・アムール』(1986)のプロデューサーでもあるセルジュ・シルベルマン(1917~2003)また助監督に付いたのは、ジャック・ベッケルの子息で、『殺意の夏』(1983)を監督しジャン・ベッケル(1933~ )です。そして、劇中に音楽は流れませんが、エンドロールで流れるのはロシアの作曲家・教育者でチャイコフスキーを門下生に持つアントン・ルビンシュタインの「へ長調のメロディー」という小品で細やかな心遣いを感じる曲です。ジャック・ベッケルの作品への愛着と感性の素晴らしさを表します。